

# WebアクセシビリティJIS

## 開発と制作における個別要件—規格・構造—

WebアクセシビリティJISは、Webサイト設計の新たなトレンドとしてまた社会的責任として、大きな注目を集めている。

規格番号である「JIS X 8341」は「やさしい(8341)」の語呂あわせだとか。だれにでも「やさしい」「使いやすい」Webサイトの作成基準とは。

### 関根千佳 = 文

ユーディット 代表取締役  
情報のユニバーサルデザイン研究所



平成16年6月にJIS X 8341-3:「高齢者・障害者等配慮設計指針—情報通信における機器、ソフトウェア及びサービス—第3部:ウェブコンテンツ」が公示されてからというもの、日本中に、Webアクセシビリティのブームがきたような印象だ。出版やセミナー、ツールの発表、自治体での勉強会などが目白押しである。Webクリエイターのブログ(日記的なWebサイト)の中にも、やはりアクセシビリティはちゃんと勉強しておこう、という論調が増えている。よい傾向だ。こういった流れが、日本のWebサイトを徐々によくしていくのだろう。

それでは、WebアクセシビリティJISの個々の作成基準を見ていこう。

## 1 開発および制作に関する個別要件

### 1.1 規格および仕様への準拠

- a Webコンテンツは、関連する技術の規格および仕様に準拠し、かつそれらの文法に従って作成しなければならない。

これは、必須条件である。Webコンテンツの作成に利用するHTMLやXMLを正しく理解し、その規格にのっとらないと正確に動作しないことがあるからだ。もちろん、保守などにも影響が出るのだから、まともなクリエイターには釈迦に説法である。

- b Webコンテンツには、アクセス可能なオブジェクトなどの技術を使うことが望ましい。

動画やFlashなどのさまざまなプラグインは、それに関連するアクセシビリティ技術を把握して使うのが望ましい。だが、これには業界でもかなり議論がある。Javaアプレットなど日本の支援技術では対応できていないものや、新技術への対応については、おのおの方針を決める必要があるだろう。

### 1.2 構造および表示スタイル

- a Webコンテンツは、見出し、段落、リストなどの要素を用いて文書の構造を規定しなければならない。

Webは、正確に構造を記述するべきという原則を定めたものである。これがないと、内容を把握して正確に情報を表示することができにくくなる。構造と表示の分離に関しては、次の項目で推奨されているが、この項目で必須にしてもよかったのではないかと感じている。

- b Webコンテンツの表示スタイルは、文書の構造と分離して、書体、サイズ、色、行間、背景色などをスタイルシートを用いて記述することが望ましい。ただし、利用者がスタイルシートを使用できない場合、または意

図的に使用しないときにおいても、Webコンテンツの閲覧および理解に支障が生じてはならない。

表示スタイルは、構造と分離し、スタイルシート(文書構造の記述)を用いるべし、とほんとうは書きたいところなのだが、対応できない作成者や、作成ツールの問題などの課題のため、推奨要件にとどまった。先進的な自治体でもまだCSS(Cascading Style Sheet: Webページのレイアウトを定義する規格)に対応していないところが多い。今後の課題ではあるが、個人的な意見としては、技術的な動向からもCSSに移行すべきであると思う。

**c** 表は、わかりやすい表題を明示し、できるかぎり単純な構造にして、適切なマーク付けによってその構造を明示しなければならない。

表は、必要な場合のみ使用する。また、表を使う場合は、構造を規定するようにとガイドされている。ここではHTMLにおける要素技術についても、詳しく例示してある。

**d** 表組みの要素をレイアウトのために使わないことが望ましい。

これはあたりまえのことだと思うのだが、メジャーなオーサリングツールでも自動的にレイアウトのために表を使用するものもあり、なかなか規制が難しいところである。

**e** ページのタイトルには、利用者がページの内容を識別できる名称を付けなければならない。

音声利用者はタイトルがないと、アドレスが読み上げられるだけで、何についてのページなのかわかりにくい。今は、ブックマークなどの登録を意識してか、Title要素を付けるようになってはきたが、内容に適したタイトルになっていないことも多い。JISの中の事例を紹介する。

**【例】** HTMLでは、head要素の中にtitle要素を用いてページ固有の名称を付ける。さらに、マーク付けすることが望ましい。ただし、ページ固有名称は、同じにならないようにする。同じページ固有名称になりがちなものには、補足情報を提供してわかりやすくする(右上図参照)。



異なるページ固有名称と補足情報を付けた例

**f** フレームは、必要以上に用いないことが望ましい。使用するときは、各フレームの役割が明確になるように配慮しなければならない。

音声ブラウザやキーボードのみによる利用者でなくとも、フレームが多用されたページは使いにくいものである。個々のフレームにスクロールバーが付いていたりすると、それだけで使用する気が失せてしまう。

**g** 閲覧しているページがWebサイトの構造のどこに位置しているか把握できるように、階層などの構造を示した情報を提供することが望ましい。

いわゆる「パンくずリンク」(下図)や、検索結果の一覧を示す数字などを使って、自分の位置を把握することが容易になるよう支援することが望ましい。

**【例】** Webサイトの構造の中での順路と、現在位置をテキストの順序などで表現する、リストなどを提供する。

[トップページ](#) > [製品一覧](#) > [加工食品](#) > [ハム](#) > [ボンレスハム](#)

リストを表示した例(パンくずリンク)

以上、開発と制作における個別要件の、規格および仕様への準拠と、構造と表示スタイルに関して簡単な解説を行った。この部分は、アクセシビリティだけではなく、コンテンツの構造把握のうえでも重要な観点なので、ユーザビリティにも大きく影響する。ぜひ制作に当たってはご配慮いただきたい。